

プラトンのイデア論

蒸し暑い毎日だが、たまには純粹世界の涼風に吹かれて頭を休めよう。ギリシヤの哲学者でソクラテスの弟子のプラトンが提出したイデアという概念がある。プラトン哲学の中心概念で、理性だけが認識できる實在、感覺的世界にある個々のものの本質・原型、そして価値判断の基準としての永遠不変の価値をいう。イデア論の基本は、純粹思考だけが捉えることのできる存在を、日常の物や事から厳格に区別して認識することにあり。我々が目で見える形は表面的だが、その背後に膨大な内容が隠れている。その姿は眼ではなく心によって洞察される。物事の眞の姿を悟ることイデアが得られるのだ。それは全ての余計なことや雑念を排除した幾何学図形みたいなものかもしれない。ソクラテスが問い求めた「何であるか」に応えるも

不変の価値示す統一的原理

のとして、プラトンはイデアを想定した。それが知の目指すべき唯一の實在であり、それなくしては確実な知はありえないと考えた。我々が日常に経験して感じること、例えば「美しさ」は不完全で一時的なものではない。眞の「美」は、そうした個々の事例を超越した完全で普遍的存在としてのイデアでなければならぬ。こうして個々の美は「美」のイデアに照らすことによって、明確な感覺として捉えられるのである。イデアは単なる觀念ではなくイデア論として倫理的領域を超えて広く認識論、存在論、自然学などにわたる統一的原理だ。なお、その語は英語の「アイデア」やドイツ語の「イデー」に受けつがれたが、プラトンは違った近世哲学独自の解釈を与えられている。

(東京大学名誉教授

和田昭允)

日経産業新聞
平成 30 年
7 月 10 日

雲のサイエンス

世の中には、毎日見ているけれど、その本当のところをよく知らないことは多い。そのひとつが雲だ。大気中に浮かぶミクロな水滴、あるいは氷晶の集まりで、地表面にあると霧と呼ばれる。金星や木星、土星にもある全宇宙的な存在だ。空気中の水蒸気が、小さなほこりの粒を凝結核として直径 3 ～ 10 μm (μm は 100 万分の 1) 位の水滴になって浮かんでいるもので、その数は 1 立方センチあたり数十～数百個ある。水粒は曲率によって融点が変わる。霧では気温がセ氏マイナス 20 度以上では水滴だが、それ以下になると凍って氷晶雲になる。水は空気より重いから、小さいから落下速度は非常に遅いので、上昇気流で浮く。雲の形は 10 種類に分類され、基本的には 3 種のメカニズムで決まる。①広範囲にわたる弱い上昇気流の結

対流圏の上にも発生

果生じる層雲系の雲②断熱不安定による積雲系の雲③雲粒が風にたなびいて生ずる巻雲系の雲④の 3 つだ。なお山岳地帯では上昇気流によって笠雲、つるし雲などが山頂付近に生じるのは富士山でおなじみだ。天気を支配する対流圏の上にも雲は発生する。山の気流が成層圏に達して生じる氷晶雲の真珠母雲。高度約 80 km にまれに発生する夜光雲がある。北欧など高緯度地方で夏の日没後に見られ、私も北極圏のラップランドで見た。雲のサイエンスについて述べたが「山のあなたの空遠く」「幸」住むと人のいふ、噫われひとと尋めゆきて「涙さしぐみかへりきぬ山のあなたになほ遠く」「幸」住むと人のいふ(カール・ブッセ、上田敏訳)のロマンの陰の主役だ。

(東京大学名誉教授

和田昭允)

日経産業新聞
平成 30 年
7 月 17 日